

日本史 アップデート

● ノーベル文学賞と日本人

ことに注目!

・ノーベル文学賞の選考過程について、50年後に開示された資料によって、候補者の氏名やそれぞれの評価が明らかになっている。1968年に川端康成が日本人で初めて同賞を受賞するまでに、谷崎潤一郎、三島由紀夫らの名前があがっていたことが判明。川端の受賞は作品の評価だけでなく、米国の日本文学研究者の意見などが影響していたことも明確になった。

・94年に大江健三郎が受賞するまでの経過が分かる資料が、50年後までに開示される。安部公房らの名前が見つかる可能性がある。

・開示資料の分析以外にも、ノーベル文学賞についての研究が進み、文化戦略としてのありようが問われている。

海外での日本観が影響

「谷崎潤一郎の死後、川端は今日の日本文学を代表して推挙することのできる、唯一の作家です」

ノーベル文学賞を決定するスウェーデン・アカデミーは2017年に、1966年の選考に関する資料を公開。川端康成の文学の理解者であった作家、伊藤整の意見書が含まれ、川端を強く推していたことが明らかになった。

選考資料は50年後に公開されることになっており、開示請求によって、候補者の氏名、それぞれの評価、受賞理由などを知ることができる。68年に川端が日本人で初めて、ノーベル文学賞を受賞するまでの経緯についても、2019年まで

に公開された資料によって、新事実が判明した。川端が候補者の一人として名前があがったのは1961年。前年までにリストアップされていた谷崎潤一郎、西脇順三郎に並んだ。63年には三島由紀夫の名前が浮上するが、川端は66年、受賞に至っている。

この間、スウェーデン・アカデミーは、エドワード・サイデンステッカー、ドナルド・キーンら、米国の日本文学研究者に意見書の提出を要請。65年には、日本に調査員を派遣し、作家や専門家らに聴取し、リストをまとめていく。68年に選考にあたったノーベル委員会の委員長が提出した

意見書では、川端の評価には「はわずかしが触れていないが、早稲田大の十重田裕一教授(日本近代文学)は、「川端は受賞まで8回候補になった。その実績が最終的に評価され、必然として選ばれたのではないか」と見る。

2019年までに開示された資料からは、谷崎や三島が選考対象から外れていく過程もうかがえる。

谷崎は1957年に「細雪」が英訳されたのを契機に、海外での知名度と評価が上昇。60年と64年には最終候補の一人に選ばれたが、谷崎自身が65年に死去し、リストから名前が消える。

三島も59年に「金閣寺」が英訳されるなどし、評価が高まった。67年には川端とともに最終候補に残ったが、1989年生まれの川端に対し、三島は1925年生まれで、年齢的な若さや三島に不利に働いた可能性がある。実際、65年の時点で、アカデミーから委託された調査員の報告書には「三島は比較的若い」という指摘があった。

63年にサイデンステッカーが執筆した意見書はさらに手厳しく三島について、「日本の最も期待される若い小説家」にとどまっている」と評価をくだしている。白百合女子大の井上隆史教授(日本近代文学)は「推薦文というより、批判文に等しい。それによって、三島受賞の芽は早い時期に摘まれたのではないかと推し量る。」

セズが克明に分かってくると、川端の受賞には、作品そのものの評価だけでなく、海外での日本観が影響していたことも見えてくる。十重田教授は「1950、60年代に海外で好んで読まれた日本文学は、オリエンタリズム(東洋趣味)に依拠した作品だった。川端を推していたサイデンステッカーも、『雪国』の芸者、『古都』の京都という日本的なるもののイメージを喚起しようとしたのだろう」と言う。

大江健三郎がノーベル文学賞を受賞したのは94年。川端のように、受賞の経緯が分かる資料が、50年後までに公開される。十重田教授は「恐らく、安部公房らが候補にあがって、大江の名前が出てくることになるのでは」と予測する。さらに、「どこかの段階で、女性作家の名前が浮上する可能性もある」と指摘。「その時は、日本初の女性候補に関心が集まるだろう」と話す。

(近藤孝)

薦者の意向、国家の戦略などの影響を受けてきたことも議論されている。井上教授は、今月刊行される「大江健三郎論 怪物作家の『本当ノ事』」(光文社)で、川端の受賞の背景には、「敗戦で失われた国家的プライドを取り戻したいという日本政府、外務省の動き」「受賞者を非ヨーロッパ圏に広げたいというスウェーデン・アカデミーの思惑」「翻訳プロジェクトを進めていた(米国の出版社の)クノッパ社の出版方針」といった「複合的な要因」があったとしている。

サイデンステッカーの「雪国」の英訳が、わいせつに感じられないよう、意図的に行われたと指摘した。「『美しい日本』というイメージにぴったりくるような評価を、西側諸国から得るため」で、背景には「冷戦下での米国の文化戦略」があったという。

近年の研究では、ノーベル文学賞の選考が、出版社や翻訳者、推

開示資料以外にも研究進む

ノーベル文学賞については、スウェーデン・アカデミーの開示資料の分析以外にも、様々な研究が進められている。2022年にドイツで開催された国際シンポジウムに参加した井上教授は、「文化戦略としてのノーベル賞のありようが問われるようになってきていると感じた」と話す。

シンポジウムで、井上教授は、

* 歴史研究が深まるにつれて日本史のトピックは見直されています。「日本史アップデート」では、研究成果を反映した最新説を、広く知られた従来説と比較しながら紹介します。「世界史アップデート」と隔週で掲載の予定です。

参考文献 十重田裕一著『川端康成 孤独を駆ける』(岩波新書)、井上隆史著『暴流の人 三島由紀夫』(平凡社)